

【資料】

沖積平野における考古歴史地理学研究予報

—北上川中流部の例—

佐島直三郎

一 序 説

(1) 位 置

北上川中流部には本支流それぞれ流域に沿うて沖積平野が形成されている。

ここは北上山地と奥羽山脈に挟まれた河谷盆地であつて、北上川の堆積作用によつて造成され、その一部すなわち本稿によつて対象とされるころの岩手県江刺市の西端稻瀬より岩谷堂、愛宕、田原および水沢市羽田町にいたるさつまいも型の地域は愛宕段丘と呼ばれているが、事實は北上川左岸に発達する氾濫原になつている。概言すれば国土地理院の五万分の一地形図黒沢尻、水沢にまたがるほぼ二〇キロに広がる沖積平野である。<sup>①②③</sup>

(2) 地 形

研究対象たる北上川中流部沖積平野の東縁は北上山地に包含される稻瀬火山岩層洪積世藤里層すなわち第三紀系江刺丘陵に接し、西縁は北上川を挟んでいわゆる胆沢扇状地の扇端に達している。

本地域は上流部鳶ノ木よりはじまる。この沖積平野は鳶ノ木において江刺丘陵より急崖となつて北上川に接すると

ころより南下するにしたがって沖積平野を広げ下川原と岩谷堂で最大となり四百目の中となる。更に南下するにしたがって徐々に縮小し、鶴ノ木新田にいたって丘陵の先端が北上川に突出している。

この標高は上流部五〇mから下流部三五mの氾濫原で、土地利用より見れば水田、畑地、桑地、荒蕪地から成り立っており、水田、畑地の割合はそれぞれ五分五分である。

集落地ならびに畑地は旧河床の自然堤防上にあつて、形態的には上流部より下流部に向つて北上川に平行的に存在している。

地質上からは沖積層植土、壤土、砂質壤土、砂土より成立している地域<sup>⑤</sup>である。

## 二、考古学的遺物

この沖積平野とそれを囲む東部北上山地江刺丘陵と西部胆沢扇状地の台地との間に侵蝕、堆積的地形的な関連があるものと考えられる上に、古文化と本沖積平野との間に密接な関係を見出すものとの主眼において、分布する考古学的遺跡遺物を地理学的処理におこうとするものである。

北上川中流部沖積平野において低湿地遺跡遺物に関する研究は少ないように思われる。<sup>⑤⑥⑦⑧⑨</sup>

北上川が蛇行し侵蝕しつつ堆積作用が行われ、いわゆる沖積平野が形成されつつあった時、縄文土器文化人がこの沖積層に足跡を印しはじめた。

しかし、エクメーネ始原としてのその文化遺跡はきわめて乏しい。(第1表)

第1表 北上川 中流部 沖積平野 遺跡, 遺物発見 地名表

No.	地名	遺跡の種類	遺跡の立地	土器					備考
				縄文	弥生	土師	須恵	その他	
1	沼ノ上	住居址?	沖積層 畑地	○				○	地下約3mのところ に丸太が3本な らんでいる
	沼尻		〃 〃					○	
2	別当		〃 〃			○			もと土壘があった ところ
3	駒込		〃 〃			○		○	遺跡地東部に東間 百間の柵のあった ところ
4	北夫間		〃 〃			○			
5	前天間		〃 〃			○			
6	林		〃 〃			○			
7	馬場先	住居址?	〃 〃			○		○	近くに白山神社あ り
8	八日市		〃 〃			○			甗形土器
9	観音堂沖	住居址?	〃 〃			○		○	江刺氏居城又は田 谷城跡といわれる
10	橋本	住居址?	〃 〃	○				○	
11	西丸	住居址?	〃 〃					○	
12	力石		〃 〃			○		○	文字入り土師「嘉」 あり俗に高城「鴻 の巢城」跡
	力石東部		〃 〃					○	
13	荒谷		〃 〃			?			甗形土器 屋号 マナイタ
14	三丁		〃 〃					○	外に「二丁目」地 名残存
15	百蓮寺		〃 〃					○	石鉢, 曲玉など
16	杉の町		〃 〃			○			紡垂車又は耳飾り か

## 三、低湿地の利用

縄文式土器のあとを次いでの弥生式の遺跡遺物は今のところ発見されていない。しかし北上川対岸の常盤広町には、この遺跡を有している<sup>⑧</sup>ので、その地形的条件から見て、左岸の低湿地にも同じような文化が芽生えておったと見ることが出来るのではなからうか。

それにあらぬか土師器を使用した人々の遺跡遺物は急激に増加する。

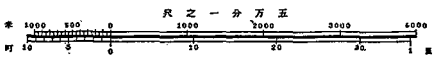
茶臼山式や和泉式の土師は発見されていないが鬼高式土器<sup>⑨</sup>に似た甑形土器がNo. 8の八日市遺跡より出土してゐる。口縁が極端に外反することなく、縦に長い胴部がゆるやかに伸びる状態より見ると東京都富士見台遺跡出土のそれに似ている。

これに似た胴部をへらで縦に調整したらしい甑の破片が近くのNo. 7馬場先より出土しているから生因、形態はほとんどNo. 7, 8とも同時代と見てよいと思われる。

この外、甑の出土と思われるのはNo. 9, 12などである。これらの地形的な位置を見ると元河床に沿う畑地であつて、いずれも一連の台地である。

これらから古文化時代の人々は胆沢城築城(八〇二年)以前、既に氾濫原上の自然堤防に生活の場を構じていたのではあるまいか。<sup>⑩</sup>

このことは蛇行乱流する旧河床に堆積作用がくり返えされ、沖積平野が完成への途上であつて農耕生活とごく原始的な漁業(漁具の出土を見ない)や狩猟生活が行われ、エクメーネとしての生活の場<sup>⑪</sup>を広めつつあつたものと思われる。



○ 米 × ス  
 繩 弥 土 須  
 文 生 師 憲

第1図 北上川中流部地形図  
 遺跡、遺物発見位置図

かくして土師器の出現が急激に増加してくるのである。

折柄、胆沢城が築きあげられる。これから当地域の原始的農耕が徐々に改良され発展を促がされたであろうが築城に使用された屋根瓦いわゆる布目瓦や須恵器はどこで造られ運搬されて来たものであろうか。多くは本地域の北方葛ノ木台地瀬谷子窯場遺跡を指定している。<sup>⑧</sup>

葛ノ木と胆沢城跡との中間地域である当地域は遺物発見地一六の中六地名は須恵を出土し、特に「馬場先より

は同時代の布目文様を出土しているので、須恵器のもつ文化相は胆沢城時代と見てよいのではなからうか。

更に No.12 力石において、畑地を開田する際、文字入土師（文字は嘉）が深皿内黒破片と共に出土している上に、その近くより管状の鉄器も出土したことから一層経済生活の伸展があったものと見てよいと思う。

かくて低湿地は一層古文化時代の人によって農耕がすすめられ、開拓され、沖積平野の造成とともに居住地域が拡大したものと見ることが出来るのである。

#### 四 要 約

(1) 北上川中流部左岸は旧河床に対する堆積作用によって形成発達をみた沖積平野である。

(2) 本地域における遺跡遺物の発見地名は少くとも一六カ所ある。しかして遺跡遺物と沖積地との関係は関連的な立場において解明されるのではなからうか。

(3) 本地域に対するエクメーネの始原は縄文時代と思われるがその文化的遺跡遺物はきわめて乏しく、弥生式土器も現在未だ発見されていない。

(4) 土師器、それは鬼高式に比定する時代急激にエクメーネが拡大される。それは社会的経済的な発展であり、沖積台地の造成にあると想定される。

(5) 特に胆沢城の築城と関連があり、江刺丘陵瀨谷子窯場とともに本地域の発展に大きく寄与し、居住地域の発展が促進されたと見なすことが出来る。

註

- ① 航空写真によれば一目にして判然とするし、沖積層の東端は江刺丘陵の急崖となっている。
- ② 「岩手県胆沢郡及其周辺の地形、地形」昭二九・みちの自然研究会
- ③ 「江刺町の分析と振興対策」『自然環境』昭三一・岩手県江刺町
- ④ 「江刺郡土性図」岩手県
- ⑤ 岩手県史Ⅰ「上代篇」
- ⑥ 草間俊一、吉田義昭「考古学提要」
- ⑦ 斎藤忠「日本考古学図鑑」
- ⑧ 伊東信雄『考古学上から見た東北古代文化』「東北史の新研究」
- ⑨ 小岩末治『岩手県における土師式文化考』「岩手史学研究二一巻」
- ⑩ 伊東信雄『岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡』「古代学第三巻二号」
- ⑪ 江刺市中央公民館長小沢守夫氏談「沼ノ上や二子町には弥生式と思われるような土器があるがよくはわからない」
- ⑫ 郷土史家菅野謙氏談「高城高畑の開田の際、用水路の底に集落址と思われる黒土層が見えた」
- ⑬ 「日本考古学講座5」『土師器』二〇六頁〜二一六頁
- ⑭ 草間俊一『盛岡市史』（先史期）二八頁
- ⑮ 前掲、岩手県史Ⅰ「上代篇」三八七頁
- ⑯ 前掲、菅野謙氏談
- ⑰ 第1表 No. 1, 6, 8, 9, 10は住居跡と思われるふしがある。
- ⑱ 文化財調査報告第四集「胆沢城跡」九二頁 岩手県教育委員会
- ⑲ 可児弘明『東京東部における低地帯と集落の発達』（考古学雑誌）第四七巻一号、二号。